



ボサノバとジャズで晩秋の穏やかな一夜を

沖 至(tp)－木村 純(g,vo) デュオ

期日:2008年11月12日(水) 19:00開場 19:30開演

入場料:3500円(前売り3000円)+1ドリンクオーダー

会場:名古屋 今池「BAR ROUX(バー ルー)」TEL. 052-733-7379

市営地下鉄各線今池駅7番出口より徒歩で1分

30数年前、故富樫雅彦等と共に前衛ジャズの真っ只中に居たトランペッター沖至は突然単身パリに渡った。その一年後沖はパリでも次第に頭角を現し、現在もパリ在住の日本人即興演奏者として第一線で活躍するジャズ界の巨匠である。彼のセンシティブに揺れ動く音は心の息遣いそのものであり、音の粒子の中を放浪する詩人のようでもある。即興演奏家の中でも彼のように詩や情景を感じさせる演奏者はなかなかいない。現在もアヴァンギャルドミュージックを中心に演奏する沖であるが、ほんの時折思いついたように歌心溢れるバラードを聴かせてくれる時がある。スタイルは違ってもそれはレイ・アームストロングやクリフォード・ブラウンのように心を打つ。管弦楽団をバックに美しいバラードを吹いている彼の唯一のアルバム「ウィズ・ストリングス」を聴けば、彼が即興演奏家である以前に、とてもロマンチストな詩人でありジャズマンであることがわかるのだ。

沖至が渡欧したちょうどそのころ、中学時代からボサノバに魅了されギタリストを目指していた木村純はボサノバギターの巨匠バーデン・パウエルが出演していることを知り、なげなしの小遣いをはたいて、赤坂の某高級キャバレーに居た。ところが、バーデンは音楽を聴きもしないで煩く騒ぐホステスに腹を立て演奏を中断し楽屋にひっこんでしまったのだ。純はすぐに彼の後を追って楽屋のドアを叩いた。彼の音楽を聴くためにだけに来た人間が居ることを知らせるために。翌日、純は彼の滞在する帝国ホテルの部屋でギターを弾いていた。彼のファンだった純は彼そっくりに弾いて見せた。彼は純に言った。「俺は二人いないよ、音楽にはオリジナリティーが大切なんだ」。その出会いの後、彼は日本滞在中、ホテルの部屋で毎日のように純にギターの技法と共にボサノバの心を教えたのだ。そして今、木村純は現在年間400回近いステージに立ちボサノバギターを弾く。彼自身のスタイルでオリジナリティーを持って。30数年前に沖至、木村純に起こった人生を左右する二つの出来事。その頃全く無関係に見えた二人が、今夜共演する演奏者として出会う。純は東京から、沖はパリからやってくる。出合いってというのはほんとに不思議なものなんだよね。。。。。

木村 純 <http://jun-kimura.jp/> 沖 至 <http://www.artcomdesign.net/OKIITARU.htm>

produced by ART/COM DESIGN <http://www.artcomdesign.net/> e-mail: mikisbag@artcomdesign.net